

平将門の「首」をめぐる表現史 — 和歌の示す呪いと笑い

青山歩友

はじめに

『将門記』は、将門の最期を次のように記している。

時に、新皇、本陣に帰るの間、咲下に立つ。貞盛、秀郷等、身命を棄てて力の限り合戦す。爰に新皇甲冑を着て、駿馬を疾めて躬自ら相戦ふ。時に現に天誥有りて、馬は風のごとく飛ぶの歩みを忘れ、人は梨老が術を失へり。新皇は暗に神鎬に中りて、終に涿鹿の野に戦ひて、独り蚩尤の地に滅びぬ。天下に未だ將軍自ら戦ひ自ら死することは有らず。誰か凶らむ、少過を糺さずして大害に及ぶとは。私に勢を施して將に公の徳を奪はむとは。仍て朱雲の人に寄せて、長鯢の頸を刎る。便ち下野国より解文を副へて、同年四月廿五日を以て、其の頸を言上す。

一族との抗争のみならず国をも相手に反乱を起こした将門は、常陸・上野・下野の国府を制圧し、自らを新皇と称して関東に勢力を誇る。しかし将門討伐を目的とする平貞盛、藤原秀郷等との戦いの末、神の放った鎬矢に当たり、独り北山の陣に滅ぶ。天慶三年（九四〇）二月十四日のことであった。そして同年四月二十五

日、将門の首は進上された。

時代は下り、中世に成立した幾つかの作品には獄門に梟けられた「将門の首」の話が描かれるようになっており、そこでは将門の首に対して次の和歌が詠まれている。

将門はこめかみよりぞ斬られる倭藤太がはかりごとにて

将門が倭藤太の計略によつてこめかみを斬られてしまった、といった歌意で、倭藤太とは先の『将門記』本文に名がある将門を討伐すべく戦つた藤原秀郷のことである。『今昔物語集』では「藤原藤太秀郷」と記されているのが（一）、ここでは「田原」に「倭」の字が当てられている。「藤太」とは藤原氏の長男であることを意味する。将門の死後、秀郷の英雄化が進んでいた時代において、藤太といえは藤原秀郷と連想することは容易であった（二）。「こめかみ」に「米」を、「田原」に「俵」を掛け、「はかり」に米を升で量るの意を込めることで「米」「俵」「量り」を縁語にするといった洒落と技巧の利いた和歌になっている。

各作品を見ると、獄門に梟けられた将門の首に向かつて和歌が

詠まれることは共通している。しかし和歌が詠まれる前の将門の首の様子、和歌を詠む人、そして和歌を聞いた後の将門の首の様子など、それぞれ異なった描写がされているのである。

本稿では『平治物語』、『太平記』、『依藤太物語』、『将門純友東西軍記』といった作品を取り上げ、描写の変遷の過程やその特徴を考察する。特に将門の首に詠まれた和歌について、その成立背景を明らかにしたい。また和歌を聞いた将門が笑う場面においてその首が発することばがそれぞれの作品において異なる点に着目し、なぜそのような笑いのことばの変化が起こったのかを探り、このような考察を通して中世期における将門像に晒された首の描写がいかに重要な要素であったのかを具体的に指摘していきたい。

一 『平治物語』と『太平記』

将門の首の話が描かれているのは、成立の早い順に『平治物語』、『太平記』、『依藤太物語』、『将門純友東西軍記』の四作品である。まず『平治物語』と『太平記』について取り上げる。

『平治物語』は鎌倉前期に成立したとされる軍記物で、上・中・下の全三巻から成る。そのうち、古態本である陽明本中巻「長田義朝を討ち六波羅に馳せ参る事付けたり大路渡して獄門に梟けらるる事」と、古活字本下巻「長田、義朝を討ち六波羅に馳せ参る

事付けたり大路渡して獄門に梟けらるる事」に将門の首の話を確認できる³⁾。では両本の本文を見ていく。(以下、陽明本を(陽)、古活字本を(古)と記す場合がある)

陽明本

昔、将門が首、獄門に梟けられたりけるを、藤六といふ歌詠が見て、

将門はこめかみよりぞ斬られる依藤太がはかりごとにて

と詠みたりければ、この首、「しい」とぞ笑ひける。二月に討たれたる首を、四月に持ちて上りて梟けたりけるに、五月三日に笑ひけるこそ恐ろしけれ。

古活字本

或る者此の落書をみて申しけるは、「昔将門が頸を獄門に懸けられたりけるを、藤六左近といふ数奇の者がみて、

将門は米かみよりぞぎられけるたはら藤太がはかりごとにて

とよみたりければ、しい、とわらひける也。」

将門は桓武の御子、葛原親王より五代、上総介高望の孫、良将が子なり。朱雀院の御宇、承平五年二月に謀叛をおこし、伯父常陸大掾国香を討てより、東国をしたがへ、下総国相馬郡に都を立て、平親王と自称せしが、六年にあたて、天慶三年二月に藤原秀郷にうたれし頸、四月の末に京着し、

五月三日にわらひしぞかし。義朝も名将なれば、此の頸も咲やせん。秀郷、国香が子貞盛と共に向(こ)てせめしかども、城こほうして落ちがたかりければ、秀郷身をやつてねらひけるが、将門容貌あひ似たる兵七人伴(こ)て、更に主従の儀なき間、すべてわきまへがたかりしに、或る時秀郷、新米を出だしたりける時、将門を見知りて、つるに是れをうつといへり。仍(こ)てかくよむなるべし。

獄門に梟けられた将門の首に対して、「藤六」といふ歌詠(陽)、「藤六左近」といふ数奇の者(古)が和歌を詠んでいる(傍線は筆者による。以下、同)。この「藤六」とは、将門と同時期に生きた平安中期の歌人、藤原輔相(？く九五六か)のことであるが、家集『藤六集』に将門の首に詠まれた和歌は収載されていない。このことから、藤六は本当の和歌の詠み人ではなく、詠み人として選ばれたということになる。その理由は、藤六が事物の名を語句に隠して詠み込む物名歌を得意としており、まさに物名歌的とも言える将門の首への和歌の詠み人として最適であったためだと考えられる。加えて「藤」六と依「藤」太という「藤」の字による繋がりを持たせることによつて、あたかも秀郷が将門の首に止めを刺しているかのような構図にしているとも考えられる。そして、和歌を聞いた将門の首は「しい」と笑う。「しい」とはあざ笑う際に発する言葉であると思われるから、将門の首は和歌の面白さに笑ったのではない。では何に対して笑ったのだろうか。自

身の最期を滑稽に詠んだ和歌に笑ったのか、それとも将門を倒した者たちに笑ったのか、ここでは追究しないが、首が討たれた三か月後に笑ったことを陽明本は「恐ろしけれ」と評しているように「しい」と笑う描写によつて将門の恐ろしさが表れている。

古活字本では、和歌の内容に至るまでの経緯が説明されている。秀郷は将門と七人の影武者たちを見分けるのに困難を極めたが、新米を差し出した時に見分けることに成功し遂に将門を討つことができたという。新米とこめかみという言葉の繋がりはあるが、新米を差し出してからこめかみを斬るに至つた説明としては内容に乏しいように感じる。ただ、陽明本より後の成立であることが確実な古活字本において、和歌を踏まえた陽明本にはない話が追加されていることは注目すべき点ではないだろうか。

ここまで『平治物語』における将門の首の話について見てきたが、将門の首の話の前に描かれている源義朝の話についても触れておきたい。そもそも将門の首の話は獄門に梟けられた義朝の首の話の類話として描かれており、義朝の首にも次のような和歌が詠まれている。

下野は木のかみにこそなれにけれよしとも見えぬかけ司かな

歌意としては、義朝は下野守から木の上に首が梟けられてしまった、なんともさえないことだ、といったところか。「木のか

み(上)に「紀伊守」を、「よ(良)しとも」に「義朝」を、「かけ」に首が木に梟けられたことと司(官職)を下野守から紀伊守に懸け替えたことを掛けており、将門の首への和歌と同様に洒落と技巧が凝らされている。しかしながら、和歌が「札に書いてぞ立てたりける」(陽)、「此の落書」(古)と落書であること、詠み人は「いかなるあとなし者」(陽)、「いかなる者」(古)と正体不明であること、そして和歌を聞いた義朝の首の様子が描かれていないことを踏まえると、この義朝の和歌は風刺である。一方で、将門の和歌の詠み人は「藤六といふ歌詠」(陽)、「藤六左近といふ奇の者」(古)と歌人であり、和歌を聞いた将門の笑う描写があることから、将門の首に詠まれた和歌は風刺ではない。つまり獄門に梟けられた首に和歌が詠まれることは同じであっても、義朝と将門の和歌は性質が異なるのである。この点については留意しておきたい。

続いて取り上げるのは『太平記』である。『太平記』は多様な諸本を持つが、そのうち古態本系とされる西源院本巻第十六「持明院殿八幡東寺に御座の事」、古態本に改訂を施した梵舜本巻第十六「日本開闢事」、古活字本である慶長八年古活字本巻第十六「日本朝敵事」、元和の片假名本巻第十六「日本朝敵の事」に将門の首の話を確認できる⁽⁴⁾。各諸本ともその本文は凡そ同じであるため、ここでは西源院本の本文を見ていく。

これのみならず、朱雀院の御宇に、将門と云ひける者、東国に下つて相馬郡に都を立て、百官を召し使うて自ら平親王

と号す。官軍拳つてこれを討たんとせしかども、その身鉄身にて、弓箭にも傷まず、鉄戟も通されざりしかば、諸卿僉議あつて、俄かに鉄の四天を鑄奉つて、比叡山に定置し、四天合行の法を行はれしに、天より白羽の矢一筋降り来たつて、将門が眉の間に立つ。その矢つひに抜かずして、俵藤太秀郷に首を刎ねられてけり。

その首、獄門に懸けて三月が間まで、眼をも塞がず、色をも変せず、常に牙嚙をして、「斬られしわが五体、いづれの処にかあらん。ここに来たれかし。わが頸を続いで今一軍せん」と夜々呼ばはりける間、聞く人これを恐れずと云ふ事なし。その比、藤六と云ふ者路を通りけるが、これを聞いて、将門は米かみよりぞ斬られる俵の藤太が謀にて

と読みたりければ、この頸、叱と咲ひけるが、眼忽ちに塞がりて、その尸つひに枯れにけり。

将門は天から降つて来た白羽の矢が眉間に立ち、その矢が抜けることはなかつたため、秀郷によつて首を刎ねられてしまった。その首は、獄門に梟けられて三か月眼を塞がず、色も変わらず、常に牙嚙みをして夜な夜な声を出しており、その声を聞く人は将門を恐れずにはいられなかつた。そこに「藤六と云ふ者」が和歌を詠むと、将門の首は「叱」と笑つたが、眼は忽ち塞がりその尸も枯れてしまった⁽⁵⁾。『平治物語』と比較すると、和歌の詠み手は「藤六」と同じである。また、笑う際に発した言葉は「叱」と

あるが、おそらく「しい」に漢字を当てたものであるからこれと同じである。一方で、異なるのは将門の首の様子である。和歌を聞く前の将門の首は牙齧みをしている。これは立腹している様子、或いは残念がる様子を表す行為であるが、復讐の念を口に出しているのを見れば怒りを露わにしているのは明らかであり、首の恐ろしさは一層増している。しかし和歌を聞くとその様子は一転し、将門の首は息絶えてしまうのである。将門はもはや武力で抑え込むことのできる人間ではなく、武力以外の力で対抗せねばならない人を超えた存在として描かれている。そして武力以外の力というのが他でもない「和歌」であった。つまり『平治物語』では単に詠まれるだけに過ぎなかった和歌が、『太平記』では将門の首を死に至らしめる呪歌的なものとして変化していることが分かる。

『太平記』は日本の歴代の朝敵として、第一に神武天皇が御代の丈二丈にもなる蜘蛛、第二に天智天皇が御代の藤原千方、そして第三に朱雀天皇が御代の平将門を挙げているのだが、二番目の藤原千方の場面は次のように記されている。

また、天智天皇の御宇、藤原千方と云ふ者あり。金鬼、風鬼、水鬼、隠形鬼と云ふ四つの鬼を使へり。金鬼は、その身堅固にして、矢を射るに立たず。風鬼は、大風を吹かせて、敵の城を吹き破る。水鬼は、洪水を流して、敵を溺らかす。隠形鬼は、その形を隠して、俄かに敵を拉ぐ。かくの如きの

神変、凡夫の力を以て防ぐべきにあらざれば、伊賀、伊勢の両国、千方のために妨げられて、王化に順ふ者なし。ここに、紀友尾と云ひける者、宣旨を蒙つてかの国に下り、一首の歌を読んで、鬼の中へぞ出だしける。

草も木もわが大君の国なればいづくか鬼の棲家なるべき四つの鬼、この歌を見て、「さては、われら悪逆無道の臣に順つて、善政有徳の君を背き奉りける事、天罰通るる所なし」とて、忽ちに方々へ去つて失せければ、千方勢ひを失ひ、やがて友尾に討たれけり。

悪業を働く四匹の鬼たちに対し、紀友尾という者が一首の和歌を鬼たちの元に送り込む。すると鬼たちはその和歌を見て改心し忽ち四方に姿を消した。その結果、鬼たちを従えていた藤原千方は勢いを失い友尾に討たれてしまった。この話の次が将門の話であることから、将門の首が和歌を聞いて息絶えたことは、鬼たちが和歌によつて改心したことの流れを汲んだものとも考えられる。

二 『依藤太物語』と『将門純友東西軍記』

つぎに『依藤太物語』と『将門純友東西軍記』をみてみよう。『依藤太物語』は南北朝期から室町前期の間に成立したとされる。藤原秀郷の武勇譚を記したこの作品は、前半部に秀郷のむかで退治

伝説と竜宮城伝説が、そして後半部に将門追討の話が描かれている。将門の首の話を見る前に、『倭藤太物語』において将門はどのような最期を遂げたのか確認しておく。

女房「夢うつゝ人にかたらぬことなれ共、御身なれば申也。うはの空におぼしめし、他人に漏らし給ふなよ。かの将門は、御かたち七人にて、御ふるまひ変ることなしと言へども、本体には、日に向ふ、ともし火に向ふ時、御影うつり給ふ。六体には、影なし。さて又御身体ごとく、黄金也と言へども、御耳のそばにこめかみと言ふところこそ肉身なり」と語らせ給へば、藤太よく／＼聞きて、あつばれ、大事をも聞きつる物かな。(中略)

藤太、物の隙よりよく／＼見れば、げにも六人には、ともし火にうつる影もなし。本体には、影のありと言ふにつめて、目をすまし見れば、時々／＼かのこめかみといふ所動きけり。藤太、あつばれさいはひかなと、弓と矢をうちつがひ、ひょうど射たりけり。もとより秀郷は、精兵の手足れ、養由が百歩の芸にも、超えたるうへ、矢ごろはまちかし。何かはもつて射せんずべき。小耳の根と思ふところを、あなたへづんど射通しければ、さしにも猛き将門も、のつけに倒れて、むなしくなれば、残る六人のかたちも、電光石火のごとくにて、光と共に失せにけり。

将門の館に身を寄せていた秀郷は、女房から七人いる将門のう

ち本体だけは火に向うと影が映ること、そして全身黄金といえどもこめかみだけは肉身であることを聞き出す。もとより秀郷は弓矢の術に優れていたため見事将門のこめかみを射ることに成功し、将門はその場に倒れ、影武者たちは光と共に失せてしまった。『倭藤太物語』は和歌の内容に沿って物語を展開させていることが分かる。そしてこの後に将門の首の話が語られる。

すなはち、檢非違使を遣はされ、将門以下の首を受け取らせて、大路をわたし、ひだりの獄門の木にかけさせけるに、将門一人の首は、いまだ眼もかれず、色も変せず。とき／＼は歯がみをしていかる気色なり。おそろしと言ふばかり也。これがある数寄の者が見て、

将門はこめかみよりも射られけり倭藤太がはかりことに
て

と詠みければ、この首、から／＼とわらひて、そののち色も
変じ、眼もふさがりけるとかや。

獄門に梟けられた将門の首の眼は枯れず、色も変わらず、時々齒噛みをしており、その様子を人々は恐ろしいと言うばかりである。そんな状況を目にした「ある数寄の者」が一首の和歌を詠むと、将門の首は「からから」と笑つて、色が変わり、眼も塞がったという。生きる将門の首が和歌を聞いたことによつて息絶えてしまうことは『太平記』と同じであるが、細かな描写には違いが見られる。例えば和歌の詠み人は藤六から「数寄の者」に変わっ

ている。これは単なる歌人ではなく、和歌を詠むためには常軌を逸脱した行為も厭わない者、大胆なことをやってのける者という意を添えよう。また和歌の三句目を見ると『平治物語』と『太平記』では「斬られける」となっていたのが、『倭藤太物語』では「射られけり」になっている。これは秀郷が将門のこめかみを射つたことに合わせて変更されたのであろう。秀郷にこめかみを射られたことを再度和歌に詠むことで、将門は既に死んだ、負けたのだと止めを刺している。そして和歌を聞いた将門の首は笑う際、『平治物語』と『太平記』では「しい」と発していたが、『倭藤太物語』では「からから」と発して息絶えている。『太平記』同様『倭藤太物語』でも和歌は呪歌として将門の首に作用している。

最後に室町時代の成立とされる『将門純友東西軍記』を取り上げたい。将門と藤原純友の反乱の顛末を記したこの作品は将門にまつわる逸話を複数載せており、その一つに将門の首の話がある。或説ニ将門ガ頸ヲカクルニ、眼シバラクカレズ、剩彼首ヨナ／＼笑テ、ムクロアラバ今一度合戦スベキトヨバフ。時ニヲコノモノアリテ、

将門ハコメカミヨリゾイラレケリタハラ藤太ガハカリゴトニテ

トヨミケレバ、眼忽チカレケルトイヒツタヘタリ。又将門ガムクロ、首ヲ追テ武州ニ来リ。豊島之郡ニテ倒ル。其靈アレテ郷民ヲナヤマス。故ニ一社ヲ建テ、晴明神ト號ス。晴ハ一

目ナキ貞也。将門貞盛ガタメニ弓手ノ眼ヲ射貫ル。故ニ郷民社ヲヨンデ晴ト云フ。遙カ後ニ神田ト云。社ノホトリニ田アルユヘニ、シカ云フト云ヒ傳ヘタリ。今神田明神ハ将門カ靈トナン。或ハ法性房受命、将門ヲ調伏スルニヨリテ、神竊将門ニ中テ死ルトモ云ヘリ。カタ／＼イブカシキコト多シ。

獄門に梟けられた将門の首は、眼はしばらく枯れず、夜な夜な笑って声を出している。そこに「ヲコノモノ」が現れて一首の和歌を詠むと、将門の首の眼は忽ち枯れてしまったという。復讐の機を狙っていた首が、和歌を聞いたことよって息絶えてしまうことは『太平記』、『倭藤太物語』と同じであるが、やはり細かな描写には違いが見られる。まず、和歌の詠み人は藤六でも数寄の者でもなくヲコノモノである。数寄の者と同様に和歌を詠むためには常軌を逸脱した行為も厭わないような人物ではあるが、「ヲコ」という言葉によつて将門の首に和歌を詠むことが如何に異様なことであるかが表現され、それだけ将門が恐ろしい存在であることが強調されている。次に、和歌の三句目が「イラレケリ」となっているが、これは明らかに『倭藤太物語』の影響を受けたものと思われる。そして和歌を聞いた将門の首は笑うことなく息絶えている。ヲコノモノが詠んだ和歌は、将門の首の笑う余裕も無くなるほど呪力が強力であったことを表しているのだろうか。将門の首の話のあとには、将門の軀が首を追い求めていたさなかに倒れて霊と化してしまったため、人々が社を建てたという話

が記されている。将門は首が息絶えたことによつて本当の終わりを迎えたはずであったが、『将門純友東西軍記』では軀にも焦点が当てられ、その軀は霊となり、そして鎮められている。

三 『師門物語』の位相

ここまで、『平治物語』、『太平記』、『依藤太物語』、『将門純友東西軍記』の四作品について見てきたが、もうひとつ取り上げた作品がある。それは室町後期成立の御伽草子『師門物語』である。話の本筋に将門が登場することは一度もないのだが、主人公の平師門が将門の末孫であることから、作品の冒頭では先祖の将門について次のように記されている。

そもく平の将門は、希代不思議の弓とり也。ものゝぐをさしかため、はんばう栗毛と申馬にうち乗りて、はせむかひたまへば、おなじやうなる武者八騎出たまへば、いづれを将門と見もわかず。これのみならず、矢をひとつはなちたまへば、八騎の武者を射てとるほどの精兵なり。されば、関東をうちしたがへ、下総の国に新京をたて、やかたに平新皇と額をうち、心のまゝにおはして、兵術をきはめたまふと言へども、勅命をそむきたまへば、われはつるにすかにてうたれたまひぬ。

やがて、首、京へまいり、獄門のひだりのわきに南むきに、

八寸のかすがひにてうちつけ申。あるときこの首、「あつぱれするかなるもくろがのぼれかし。しやくすがひをはね抜きてもくろに飛びつき、うしとらにたちたまふ多聞天の持ちたまへる剣を奪ひとつて、みやへみだれ人、思ふ敵をうつべきものを」と言ひて、南むきなる首が東へきつとうちむきて、しもと笑ひける。

傍線部に注目したい。これまでに取り上げた四作品と同様に、将門の首の話が描かれているのだが、大きく異なる点として、将門の首に対して和歌を詠む描写がない。その結果、止めを刺されることなく虎視眈々と復讐の機を狙う将門が描かれているのである。「しぬ」の笑いの描写も和歌と切り離されるかたちで改めて将門の所作として表現され直されている。

『平治物語』では将門の首の話は一つの類話に過ぎず、首に対して和歌が詠まれてその首は笑うだけであった。しかし『太平記』では首の様子が詳しく描かれるようになり、生きる将門の首は和歌を聞いたことによつて息絶えてしまい、ここで和歌は将門を死に至らしめる呪歌となる。その後、『依藤太物語』では和歌の内容に沿つて物語が展開されていき、その結びとして将門の首の話が描かれる。そして『将門純友東西軍記』では将門の首の話は将門にまつわる伝説の一つとして語られるのである。ただし『師門物語』のような例外もある。

四 『愚管抄』から考える「将門の首」への和歌成立の背景

ここでは将門の首に対して詠まれた和歌の成立背景について筆者なりに考察してみたい。当該歌は『平治物語』に初めて登場する。『平治物語』では将門の首だけでなく、義朝の首に対しても和歌が詠まれているのだが、その和歌は『平治物語』の他、鎌倉初期成立の史論書『愚管抄』にも確認できる。

サテ義朝ガ頸ハトリテ京ヘマイラセテワタシテ、東ノ獄門ノアテノ木ニカケタリケル。ソノ頸ノカタハラニ歌ヲヨミテカキツケタリケルヲミケレバ、

下ツケハ木ノ上ニコソナリニケレヨシトモミヘヌカケツ

カサ哉

トナンヨメリケル。是ヲミル人カヤウノ歌ノ中ニ、コレ程一文字モアダナラヌ歌コソナケレトノ、シリケリ。九條ノ大相国伊通ノ公ゾカゝル歌ヨミテ、オホクオトシ文ニカキナドシケルトゾ、時ノ人思ヒタリケル。

獄門に梟けられた義朝の首の傍らに一首の和歌が詠まれている。人々は和歌をこれ程までに語句に無駄のないものはないと噂し、このような和歌を詠んだのは「九條ノ大相国伊通ノ公」(6)であるうと推測したという。

『愚管抄』が慈円によって著述されたこと、そして承久二年(一二二〇)に成立したことは確かであるから、その史実性は高

い。よって義朝の首に対して本当に和歌が詠まれたとはいかないまでも、詠まれたと噂されていたことは事実なのだろう。そして『愚管抄』が『平治物語』より先に成立した可能性が高いことから、義朝の首に詠まれた和歌は『平治物語』の成立前に作られていたことは明らかである。では、将門の首に詠まれた和歌はどうだろう。『平治物語』にて義朝の首の和歌に引き寄せられるかたちで将門の歌が記載されたのはまず言つてよいであろう。しかし先にも述べたが義朝の首と将門の首に対して詠まれた和歌は性質が異なるため、『平治物語』とは別に作られていたと考えられるのである。果たしてそれがいつ頃のことであつたのか、具体的な時期を明らかにすることは困難だが、義朝の首への和歌の作られた時期からそこまで離れることはないと考ええる。

ところで『平治物語』と同時期に成立した作品に『保元物語』(半井本)には、次のような場面がある。

西行法師、讃岐へ渡リタリケルニ、国府ノ御前ニ参テ、カクゾツタリケル、

松山ノ浪ニユラレテコシ船ノヤガテ空ク成ニケル哉

白峰ノ御墓ニ参テ、ツククト候、泣、カウゾ仕リケル。

ヨシヤ君昔ノ玉ノユカトテモカ、ラン後ハ何ニカハセン
怨霊モ静リ給フラムトゾ聞シ。

西行は讃岐国に渡つて崇徳院の御墓に参り、一首の和歌を詠んだ。すると崇徳院の怨霊は静かになつたことが描かれている。

歌人の詠んだ和歌に人間ではない者が反応を示す点において将門の場面と類似している。『保元物語』の本場面が将門の場面に影響を与えた、受けた関係があるかは定かではない。ただ、将門の首が和歌によって息絶えるのは『太平記』から見られる描写であるが、既に『平治物語』成立時には和歌が怨霊を鎮めることができるという着想があつたことは興味深い。

ここまで将門の首の話がどのように変化していったのかを見てきたが、ひとつ見過ごせない描写がある。それは和歌を聞いた将門が笑う際に発する言葉である。『平治物語』、『太平記』では「しい」と笑っていたのが、『俵藤太物語』では「からから」と笑っている。なぜこのような変化が起こったのかを次に考えてみたい。

五 「し」について

まず、「しい」とはどのような意味を持ち合わせた笑い声なのか、複数の辞典を基に確認する。

『日葡辞書』 記述なし

『時代別国語大辞典 室町時代編三』

記述なし

『日本国語大辞典』

〔感動〕

①あざ笑う時に発する語。ふん。

例「将門は米かみよりぞぎられるたはら藤太がはかりこ
とにてとよみたりければ、しい、とわらひける也」

〔平治物語・下・長田、義朝を討ち六波羅に馳せ参る事〕
(1220頃か)

②他を制止する時に発する語。し。

例「何じゃ七本八本」し。七重八重で御さる」

〔虎寛本狂言・秋大名〕(室町末く近世初)

③動物などを追う時に発する語。し。

例「見た所はちいさい池成れども、うをはおびただしう有
る。シイシイシイ」

〔虎寛本狂言・武悪〕(室町末く近世初)

例「しいといふ馬追声も聞かぬわいの」

〔浄瑠璃・中・丹波与作待夜の小屋節〕(1707頃)

④人に呼びかける時に発する語。また、先払いの時に発する語。

例「しいしい申」

〔虎明本狂言・鼻取相撲〕(室町末く近世初)

『角川古語大辞典』

〔感動詞〕

①あざ笑う笑い声を表すという。舌打ちに近いものか。

例「…と(歌ヲ)よみたりければ、しいとわらひける也」

〔平治物語・下〕

②相手のことを制止するときに発する声。

例「何じや。こぶく。シイ。古木で御さる」

〔虎寛本狂言・萩大名〕

③動物を追う声。

例「見た所はちいさい池成れども、うをはおびた、しう有る。シイくくく」

〔虎寛本狂言・武悪〕

例「しひといふ馬おひ声も聞かぬわいの」

〔丹波与作待夜小室節・中〕

『日葡辞書』と『時代別国語大辞典 室町時代編三』に擬声語としての「しい」の説明はなかった。それ以外の辞典では、傍線部の通り「しい」とはあざ笑う際に発せられる声、或いは笑い声であると説明がされている。しかしその用例に挙げられているのは『平治物語』での将門の首の場面のみであり、その他の作品を用例に挙げる辞典は一つもない。そこで、『平治物語』より先に成立した作品に「しい」と笑う描写がないか調査したが、管見では探し得なかった。加えて「しい」のその他の意味の用例に挙げられているのが『平治物語』より後に成立したものであることも踏まえると、「しい」という声は『平治物語』での将門の首の場

面が初出である可能性が浮上する。その場合、「しい」があざ笑いの声であることは将門の首の場面に基に定義されたということになる。これは、言い換えれば、将門の首の場面理解次第では「しい」には「あざ笑い」の声以外の意味も考えられるということではないだろうか。「しい」という言葉については改めて考察し直す必要がある。

西源院本『太平記』で「しい」に「叱」の字が当てられていることに注目する。この「叱」という字の持つ意味について、『大漢語林』は一つ目に「しかる。どなる。」、二つ目に「ののしる。責める。」、そして三つ目に「舌うちする音。しかる声・ののしる声の形容。」と説明している。このことから、「しい」を「叱」と解釈した場合は笑い声ではなく、怒りの状態を表す言葉、もしくは舌打ちのような言葉であるとも考ええる。将門が自身の最期を滑稽に詠んだ和歌に対して怒りを露わにすることはなんら不自然なことではない。

将門の発した「しい」という言葉については、「あざ笑う」声を表すのが現代の辞書的な意味であるが、怒りを表す言葉であると理解しているところも見受けられ断言することはできない。

おそらくこのことは当時も違和感を持たれていた可能性があり、その結果、次に述べる「からから」という比較的わかりやすい表現に置き換わっていった理由の一つではないかと推測できる。

六 「からから」について

「しい」と笑っていた将門は、やがて「からから」と笑うようになる。なぜこのような変化が起こったのかを探る前に、まずは「からから」の意味を確認する。「からから」とは中世期の用例としては武者の豪胆さという場面で用いられることが多いようである。まず辞書の意味をいくつか確認する。

『日葡辞書』

Caracara. カラカラ (からから)

〔副詞〕

大笑いするさま。

Caracarato. カラカラト (からからと)

同上

『時代別国語辞典 室町時代編一』

〔副詞〕

①愉快そうに声高く笑うさま。

例「カラ〜ト〜咲」

例「Caracara (カラカラ)。副詞。大笑いするさま」

「Caracarato (カラカラト)。同上(カラカラ)。「カラカラト笑ウ」。大笑いをする」

〔日葡〕

例「仲尼曰―(讀若殆往而刑耳) 讀ヲ玄ハ怪笑ゾト見。孔子ノカラカラト笑ゾ。ワドノハイタラバ大事ニアワンゾ」

〔莊子抄・二〕

例「カラカラト打笑テ大般若ノ櫃ノ中ヲ能々搜シタレバ、大塔宮ハイラセ給ハデ、大唐ノ玄奘三藏コソ坐シケレト戯レケレバ」

〔太平記・五・大塔宮熊野落事〕

『日本国語大辞典』

〔副詞〕

①(多く「と」を伴って用いる)さわやかに高く笑う声を表す語。

例「めづらしきあづま男をこそ御らんぜられ候はんずらめとて、からからとわらひ給へば」

〔平家物語・一一・先帝身投〕(13C前)

例「快実是を見てからからと打ち咲(わらふ)て」

〔太平記・二・師賢登山事〕(14C後)

例「孔子のからからと笑ぞ」

〔清原国賢書写本莊子抄〕(1530)

例「Caracarato (カラカラト) ワラフ」

〔ロドリゲス日本大文典(1604〜08)〕

例「可羅(カラ)可羅と笑て曰く、面白(おもしろ)面白(洒落本・風俗七遊談・三・妾の譚)(1756)

例「高間四郎『然(カラカラ)』とうち笑ひ」

〔読本・椿説弓張月〕(1807〜11)

例「旧を談じて呵々(カラカラ)と笑ひ、新を語りて『氣

の毒』と云ふ」

〔自然と人生(徳富蘆花) 写生帖・断崖〕(1900)

『角川古語大辞典』

〔副詞〕擬声語。

②さわやかに高く大きな声で笑う声。「かんらかんら」とも。

例「新中納言知盛脚、……からく〜とわらひ給へば」

〔平家物語・一一・先帝身投〕

「てるとらからく〜と打笑ひお聞なされ信玄」

〔信州川中島合戦・一〕

傍線部の通り「からから」とはさわやかに高く大きく笑う声であると説明がされており、また辞典類にあげられている用例を見てわかるように軍記物語の笑いの表現との関係性が高いように思われる。辞書ですであげられているものもあるが、ここでは軍記物語において「からから」がどのような場面で用いられているかを具体的に確認しておきたい。『太平記』、『平家物語』、『曾我物語』の三作品で確認でき、まず、『太平記』に見られたのは次の二つの場面である。

卷第十六「楠正成兄弟以下湊川にて自害の事」

……機すでに疲れければ、湊川の北に当る在家の一村ありける中へ走り入り、腹を切らんとて舎弟正季に申しけるは、「そもそも最後の一念によつて、善悪生を拽くといへり。九界の中には、何れのところか、御辺の願ひなる。直にその所に到るべし」と問へば、正季からからと打ち笑ひて、「ただ七生までも同じ人間に生れて、朝敵を亡ぼさばやとこそ存じ候へ」と申しければ、正成よにも心よげなる気色にて、「罪業深き悪念なれども、我も左様に思ふなり。いざさらば、同じく生を替へて、この本懐を遂げん」と契つて、兄弟ともに刺し違へて、同じ枕に伏しければ、橋本八郎正貞・宇佐美・神宮寺を始めとして、宗徒の一族十六人、相隨ふ兵五十余人、思ひ思ひに並居て、一度に腹をぞ切つたりける。

卷第二十「結城入道病死の事」

……この入道すでに目をふさがんとしけるが、かつばとはい起きて、からからと打ち笑ひ、わなないたる声にて申しけるは、「我すでに齡七旬に及んで、榮華身に余りぬれば、今生において一事も思ひ残す事候はず。ただし、今度罷り上つて、つひに朝敵を滅ぼし得ずして、空しく黄泉の旅に赴きぬる事、多生劫までの妄念となりぬと覚え候ふ。されば、愚息にて候ふ権少輔にも、我が後生を訪はんと思はば、供仏施僧の作善をも致すべからず、称名読経の追費をも作す事なかれ。ただ、朝敵の首を取つて、我が墓の前にてかけて見すべしと、申し

定めける由を伝へて玉はり候へ」と、これを最後の言にて、
 刀を抜いて逆手に持ちて、齒咬をしてぞ死しにけり。罪障甚
 重の人多しといへども、終焉にこれ程の悪相を現ずる事、い
 まだ聞かざるところなり。

一つ目の場面では、自ら命を絶つことを決断すると「からから」と笑つてその生涯を終えている。二つ目の場面では、眼を塞いだかと思えば突然起きて「からから」と笑い、息を引き取っている。次に、『平家物語』に見られたのは次の場面である。

卷第十一 先帝身投

源氏の兵者共、すでに平家の舟に乗りうつりければ、水手梶取ども、射ころされ、きりころされて、舟をなほすに及ばず、舟そこにはたはれふしにけり。新中納言知盛卿、少舟に乗つて御所の御舟に参り、「世のなかは今ばかりと見えて候。見苦しからん物共、みな海へいれさせ給へ」とて、艫舳にはしりまはり、掃いたりのごうたり、塵拾ひ、手づから掃除せられけり。女房達、「中納言殿、いくさはいかにやいかに」と口々に問ひ給へば、「めづらしきあづま男をこそ御覧せられ候はんずらめ」とて、から／＼とわらひ給へば、「なんでうのただいまのたはぶれぞや」とて、声々にをめきさけび給ひけり。この場面では、戦いの様子を聞かれた平知盛が、厳しい状況にあるとは答えず冗談を言つて「からから」と笑つている。直接的な死の描写がある訳ではないが、死がすぐそこにあることを悟つ

ていたことは確かである。

最後に、『曾我物語』に見られたのは次の場面である。

卷第九

御厩の小平次に仰せて切るべかりしを、犬房がひらに所望申しけるにより、犬房が手へ渡されける。犬房が郎等、請け取りて出でければ、垣のごとくなる勢の中をつつと通りけるが、四方を見回して、をかしくもなき笑ひをからからとして申しけるは、「これを見て、人々のさこそをかしく思ふらん。されども、これは父のために捨つる命なれば、さだめて天衆地類も影向し給ふらん。時宗が付くところの縄は、善の縄ぞかし。各々、手を掛けよや」とぞ言ひける。その後、傍らへ引き入れ、犬房が郎等平四郎といふ者に、「これを切れ」と言ひければ、「この殿、五つ、六つの頃まで育ち合ひ参らせ候へば、日來の情も忘れず候ふに、枉げて他人に仰せ付けらるべく候ふ」と申しければ、「これも理なり。しからは、別人に替えよ」と申しければ、筑紫仲太とて御家人ありけるが、左衛門尉に付きて本領を訴訟しけるが、申し乞ひて切つてんげり。わぎと鈍き刀をもつて、擦り首にぞしたりける。これは、苦しみを久しからしめん料なりけり。

この場面では、曾我五郎が処刑される直前に「からから」と笑い、その首を斬られている。

いずれの場面にも共通しているのは、自身の死を覚悟した上で

豪胆に「からから」と笑っているということである。豪胆な中世武者の辞世の笑いでとも言えよいのであるうか。将門の首の場面を考えて、将門の首は和歌によって自身の死を覚悟したため大胆に「からから」と笑い、そして息絶えたということになる。おそらくは将門を象徴する何かしらのことばであった「しい」という不気味な感覚を残す語感が消え去り、ある意味、わかりやすいことばへと置き換えられているのである。

おわりに

さて、中世から時代は下り、近世に成立した『前太平記』は将門の首の話のように記している。

或説に将門が首、梟木に懸けて曝すに、三月まで其色変ぜず、猶生けるがごとくにて、眼をも塞がず常に牙を嚙むで、「斬られし我が体、何かの処にか有る。此に來たれ。頭継ひで今一軍せん」と夜な／＼呼ばりける間、聞く人は是を怖ぢ畏れずと云ふ事無し。時に、道過ぐる人は是を聞きて、

将門は、米かみよりぞ、斬られける、俵藤太が謀にてと詠みたりければ、此首から／＼と笑ひけるが、眼忽ちに塞ぎけり。其後尚東国懐かしくや思ひけん、此首飛んで空に翔り、武蔵国とある田の辺りにぞ落ちにける。其より毎夜光を

現し、見る人肝を冷やさずと云ふ者なし。斯かる希代の癖者なれば、何なる祟りをか成しつらんとて、聽て其所に叢祠を建て、神田明神と祝ひけり。さてこそ其忿りも鎮まりてや、異なる子細も無かりけり。

傍線部に注目したい。和歌によって息の根を止められたはずの将門の首が、あろうことか飛んで空を翔けている。『平治物語』での和歌に笑う将門の首から始まり、『太平記』、『俵藤太物語』、そして『将門純友東西軍記』を経て将門の首は和歌によって息絶え、将門の首の話は完結したかのようにみえた。しかし、近世になつて将門の首が息を吹き返すことで、将門の首の話はさらなる展開をみせるのである。

そして現在、将門の首といえは飛んだこと、その首を祀る将門の首塚があることで広く知られている。中世において諸作品で描かれていた将門の首に詠まれた和歌の場面が語り継がれることはなかつたのである。

注

- (1) 「平維茂尉藤原諸任語第五」(『新編日本古典文学全集37 今昔物語集三』小学館)に「田原藤太秀郷」と記されている。
- (2) 植木朝子「藤太巫女」考『梁塵秘抄』三三四番〜三二八番歌の配列をめぐって(『国文』第七十八号一九九

三年一月)に依る。

(3) 『新編日本古典文学全集41』によれば、学習院図書館蔵九条家旧蔵本・島原図書館蔵松平文庫本・今治市河野美術館蔵本も陽明本中巻と同じ本文を持つという。その他の諸本として、最も広く流布したとされる金刀比羅本に将門の首の話は記されていないかった。

(4) その他の諸本として、古態本である神田本と玄玖本、そして古態本に改訂を施した天正本に将門の首の話は記されていないかった。

(5) 梵舜本、古活字本では和歌の詠み人は「道過ぐる人」、和歌を聞いた将門の首は「からから」と笑っている。また、将門の首の様子について、『太平記』巻第四「呉越闘ひの事」の「旗鉾の上に懸けられたりし一双の眼、三年まで未だ枯れずしてありけるが、その眸明らかに開き、相見て笑へる気色なり」、或いは巻第十三「干将鎮椰の事」の「三月までその頸更に爛れず。目を見張り、歯を食ひしぼりて、常に歯がみをしける間、…」に類似している。

(6) 「九條ノ大相国伊通ノ公」とは平安後期鈞公卿、藤原伊通(一〇九三〜一一六五)のことであるが、なぜこの人物が和歌の詠み人とされたかは不明である。

※使用本文

『将門記』…『新編日本古典文学全集41』小学館、二〇〇二年

『平治物語』…『新編日本古典文学全集41』小学館、二〇〇二年(陽明本)

『日本古典文学大系31』岩波書店、一九六一年(古活字本)

『太平記』…『太平記(三)』岩波書店、二〇一五年(第一章)
『新編日本古典文学全集55』小学館、一九九六年(第六章)

『依藤太物語』…『新日本古典文学大系55』岩波書店、一九九二年

『将門純友東西軍記』…『統群書類従』(更宣上、一部本文を改めた)。

『師門物語』…『新日本古典文学大系55』岩波書店、一九九二年

『愚管抄』…『日本古典文学大系86』岩波書店、一九六七年

『保元物語』…『新日本古典文学大系43』岩波書店、一九九二年

『平家物語』…『新編日本古典文学全集46』小学館、一九九四年

『曾我物語』…『新編日本古典文学全集53』小学館、二〇〇〇年

『前太平記』……『叢書江戸文庫3 前太平記〔上〕』国書刊行
 会、一九八八年

〈あおやまふゆ／二〇二二年日本語・日本文学科卒〉

第二〇五号 目次

二〇二二年一月

- 学人露伴（四）——仏教・その三——…………… 関谷 博
 『日葡辞書』における amor（愛）の現れ方について（上）
 ……………… 漆崎 正人
 尾崎紅葉『金色夜叉』における不可能表現の特徴
 ——漢文訓読系の語法と和文系の語法——…………… 揚妻 祐樹
 一冊 五〇〇円